

あ、おいしい。



緊急生産調整推進対策の計画的な推進を図ろう。
直播栽培等新技術の導入と地域性を活かした米づくりを進めよう！

平成11年度 稲作情報

会津版
第4号

平成11年 7月7日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県の米稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場会津支場

基本技術を励行し、安定多収・良質良食味の会津産米の更なる向上を図ろう

1 力月予報（7月2日仙台管区気象台発表）

7月10日～7月16日：太平洋側を中心に平年同様、曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は低い見込み。

7月17日～7月30日：平年同様、晴れの日が多くなるでしょう。平均気温は平年並みの見込み。

移植栽培の当面する技術対策のポイント

栄養管理といもち病防除の徹底を！！

1 生育状況

- (1)試験場内の生育：草丈が平坦部は平年並～やや短い。高冷地は平年並～やや長い。茎数は平坦部のコシヒカリは少ないが他は平年並み。高冷地は各品種とも平年より多い（表1）。主稈出葉からみた生育は平坦部が平年並～3日遅く、高冷地はまいひめ以外は1～3日進んでいる。

現在の生育から予想される幼穂形成始期及び減数分裂期は、ほぼ平年並になるとと思われる（表3）。

- (2)土壌中のアンモニア態窒素は、6月下旬～7月上旬にかけて急激に低下している（表2）。

- (3)現地の生育：草丈は平年並み。ほ場間差は見られるが必要茎数は確保された。葉色はさめ始めている。

2 当面の技術対策

- (1)水 管 理 中干しは幼穂形成期までには終了し、以降は間断かんがいとし、根の健全化と作土の固着維持を図る。幼穂形成期、減数分裂期に17℃以下の気温が予想される場合は、深水管理により幼穂を保護する。
- (2)追 肥 つなぎ肥は、葉色が極端に低下した場合を除き控える。施用量はムラ直し程度とする。穂肥は、生育量、葉色により診断し慎重に行う。基準より生育量が大きかったり葉色が濃い場合は、時期を遅らせたり、減量する（表5）。
- (3)いもち病 会津地方の本田移植株での葉いもち確認日は平年より9日早い。置苗からの感染である。
防除 会津地方の7月以降の感染好適日の出現日数は他地方より少ない。
葉いもちの早期発見に努め、発生を確認したら直ちに液剤か粉剤による防除を実施する。育苗箱施薬や粒剤による葉いもち予防を行ったほ場でも、発生が認められた場合は、散布剤による防除を行う。上位葉の葉いもちは、穂いもちに直結するため防除を徹底する。穂いもち防除を粒剤で行う場合は、出穂10～20日前までに湛水状態で施用する。

直播栽培の当面する技術対策のポイント

倒伏させない管理と除草剤耐性？雑草の防除を！！

1 生育状況

- (1)会津支場内5月10日播きの生育：草丈は平年より短く、茎数も少ない。葉数はほぼ平年並。（表4）。

- (2)現地の生育：苗立ちが悪かったほ場以外は生育良好である。生育過剰田も散見される。

2 当面の技術対策

- (1)水管理 倒伏防止と過剰生育を防ぐため、幼穂形成期まで中干しを継続する。
- (2)肥培管理 ほ場間の差が大きい。窒素の追肥は、幼穂形成期の生育量を確認し、必要な場合は穂肥の時期に行う。施用量は移植栽培よりも控え目とし、稈の伸長を防ぐ。
- (3)雑草防除 アゼナ、ホタルイ、アメリカセンダングサ、クサネム等が見られる場合はMCP剤やベンタゾン剤で防除する。MCPを含む剤は幼穂形成期以前に使用する。特に、アゼナ、ホタルイが残草したほ場は、SU剤耐性の恐れがあるため徹底防除する。
- (4)いもち 移植栽培と同様に、ほ場をよく見回り、早期発見、早期防除に努める。
防除

具体的なデータ

表1 7月5日の生育状況（作況試験・中苗・5月20日植）

品 種 年次	会津支場（平坦部）				品 種 年次	冷 試（高冷地）			
	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (枚)	葉色 (SPAD)		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (枚)	葉色 (SPAD)
ひとめぼれ 本年	57.9	844	10.2	42.4	まい 本年	46.9	760	8.9	39.8
前年	53.1	825	10.1	42.9	ひ め 前年	44.1	639	8.8	42.6
平年	57.8	844	10.2	44.0	平年	46.6	640	9.0	43.2
平年比・差	100	100	0.0	-1.6	平年比・差	101	119	-0.1	-3.4
コシヒカリ 本年	56.2	636	9.8	40.2	初 星 本年	46.1	795	9.6	41.6
前年	53.6	672	10.1	40.1	前年	47.3	857	9.2	44.7
平年	58.4	813	10.2	41.2	平年	46.0	718	9.2	44.6
平年比・差	96	78	-0.4	-1.0	平年比・差	100	111	+0.4	-3.0

表2 土壤中のNH₄-N

場所 年次	NH ₄ -N(mg/乾土100g)	
	6月下旬	7月上旬
会津 本年	4.34	0.88
支場 前年	3.90	1.57
平年	4.79	1.42
冷試 本年	5.79	1.82
前年	7.97	1.49
平年	5.13	1.68

注：地力試験三要素区

表3 幼穂形成始期と減数分裂期の予想

品 種	幼穂形成始期		減数分裂期	
	本 年	平 年	本 年	平 年
会 初 星	(7.10)	7. 9	(7.17~7.22)	
津 ひとめぼれ	(7.13)	7.12	(7.21~7.26)	
支 ササニシキ	(7.13)	7.12	(7.22~7.27)	
場 コシヒカリ	(7.)	7.19	(7. ~8.)	
冷 まいひめ	(7.11)	7.10	(7.24~7.29)	
試 初 星	(7.14)	7.15	(7.27~8. 1)	

注：作況試験・中苗・5月20日植

表4 湛水直播生育状況（播種後60日）

試験 年次	播種日	苗立ち数	草丈	茎数	葉数
場所	(月・日)	(本/m ²)	(cm)	(本/m ²)	(葉)
会津 平11	5.10	62	43.8	661	9.6
支場 平10	5. 8	127	60.5	889	9.6
平 9	5. 9	135	59.6	920	9.3
平年	5. 9	128	57.8	836	9.4
平年比	+1	48	76	79	0.2

注：品種 ひとめぼれ

表5 生育診断と穂肥の目安

	草丈 (cm)	幼穂形成期		ヨード加 (%)	穂肥の施用時期と施用量	
		葉 カラー・スケール	色 SPAD502		出穂前日数 (日)	窒素成分量 (kg/10a)
平 ひとめぼれ	65~70	3.5~4.0	37~41		-24~-20	2.0
		4.0以上	42以上		-15	1.5~2.0
担 ササニシキ	65以下	3.0~3.5	33~37	55以上	-15	1.5~2.0
		3.5以上	38以上		-15~-10	1.0~1.5
地 コシヒカリ	65~70	3.0~3.5	34~39	55以上	-15	1.5~2.0
		3.5以上	40以上		-15~-10	1.0
山 まいひめ	55以下	4.0未満	42未満		-24~-20	2.0
間		4.0以上	42以上		-15	2.0
地 初 星	55以下	4.0未満	40未満		-24~-20	2.0
		4.0以上	40以上		-15	2.0

大豆・ソバ栽培の技術対策のポイント

(1)大豆

追肥培土 5～6葉期に達したので、2回目の中耕培土を早急に行う（第1本葉節が隠れる程度）。

中耕培土時に、コーティング尿素（LPコート70）を窒素成分で6kg/10a施用する。

害虫防除 病害を媒介するアブラムシ類や、高温年に多発するハダニ類を中心に防除を防除する。

(2)ソバ

排水対策 ソバは湿害に極めて弱い。特に、転換畑ではほ場の団地化と明渠設置が有効である。

種子準備 種子は良く選別し、充実した種子を用いる。10a当りの播種量は、条播で3～5kg、散播は6～8kgである。

播種時期 播種適期は平坦部が7月下旬～8月上旬。山間部は7月中旬～下旬である。また、播種期～成熟期の日数は品種により60日～80日程度の幅があるため利用品種により播種期を調整する。